

# “おいかげのおじちゃん” いつもありがとうございます



写真展会場の自筆のメッセージの前で

の思いから矢も楯もたまらず、車を飛ばし現地へ向かいました。

夜通し車を走らせ、行きついたのは南三陸町。被災地のあまりの惨状に愕然としつつも、「子どもたちのために」とボランティアセンターに申し出たところ、紹介されたのは「あさひ幼稚園」でした。津波で園が流れ、公民館に集まっていた子どもたち。もちろん、おもちゃも本も何もありません。さらに、先生方が困っていたのは「食料不足」です。

笈掛さんは、さつそく来た道を引き返し、あちこちでカツラーメンやパンなどを調達し届けました。帰り際、子どもたちが「ありがとう」「またきてね」と大きな声で見送っています。

## 自作の紙芝居で 子どもたちにメッセージ

20歳から合唱を始め、50歳で油彩画、60歳で昔語り、70歳で琵琶を習い始めたという多趣味な笈掛さん。

被災地では、鎮魂のための演奏もしています。

写真展では、南三陸町の被害を物語る写真も展示されていましたが、印象に残るのは、笈掛さんが届けた果物を手にした子どもたちの笑顔や、紙芝居に見るいきいきとした表情。

東日本大震災の発生直後より、宮城県南三陸町の子どもたちを支援し、現在も交流を続いている笈掛昇さん（山形県米沢市在住・79歳）。

2014（平成26）年、

山形県米沢「小さな親切」の会（事務局：米沢市教育委員会）の推薦で、  
「小さな親切」実行章を受章。

今年7月、南三陸町の子どもたちとの交流を記録した  
写真展を開催するとお聞きし、お話を伺いました。

絵本やおもちゃを集め、段ボール22箱分を届けたことも。

震災から8年、累計の訪問回数は200回近くになり、今では「おいかげのおじちゃん」として、子どもたちとはすっかり顔なじみとなりました」と、顔がほころびます。

震災後10年となる2021年まで、

子どもたちとの交流を続けたいと意気込みを語ってくださいました。

（文責 今野緒子）

東日本大震災発生後、米沢市に

は被災地から多くの方が避難していました。若いころ、登山道の整備を始めたことがきっかけで、「人の役に立ちたい」という思い

をずっと持ち続けていた笈掛さんは、避難所で被災された方の話し相手となるボランティアに志願。2ヶ月ほどでそのボランティアが終了すると、さらに被災地の方の支援をしたいと

思ふまでもなく、中学生になった年の夏から、米沢市に

向う、遠い南三陸育つ。海と山を生きながら、自分で育てられた。今は、自分が困っていたのは「食料不足」です。

笈掛さんは、さつそく来た道を引き返し、あちこちでカツラーメンやパンなどを調達し届けました。帰り際、子どもたちが「ありがとう」「またきてね」と大きな声で見送つてくれたとき、胸がジーンと熱くなり涙が止まらなかつたそうです。

それ以来、定期的に南三陸町の保育園や幼稚園を訪問。遊び道具のない子どもたちのため、不要になつた



子どもたちの写真と笈掛さん自作の紙芝居